
IS こんな始まり

ミス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS こんな始まり

【Nコード】

N8145Y

【作者名】

ミニス

【あらすじ】

これは織斑一夏がIS学園に入る前のIF。

この作品は作者の気まぐれであり、勢いで書かれた物です。勢いで書いたため内容はかなり酷いかも知れませんが。

「さて、もうそろそろ時間かな」

そう言いながら俺は体を伸ばす。それから周りを見渡す。ここは俺の部屋、部屋の広さは八畳でフローリング。それにベットと机、本棚とまあよくある部屋だ。そんな部屋を眺めていたらドアを叩く音がしたので、返事をしてドアを開けた。ドアを開け、ノックしていた人を確認した。女の子で青い髪が肩にかかるくらいの長さ。癖毛で内側にハネている。赤い瞳、顔はかわいい。俺はそう思う。そして長方形レンズのメガネをかけている。彼女の名前は更識簪。俺の幼なじみだ。

簪「一夏、そろそろ訓練を始めるって」

一夏「わかった。すぐに行くよ」

そう言っただけ俺は簪に笑顔を見たら、急に顔を逸らされた。なぜだ？顔を逸らした簪の横顔が見えて、ちょっと頬が赤くなっていることに気づいた。具合でも悪いのかな？

一夏「どうした簪？顔が赤いけど具合でも悪いのか？もしそうなら無理しないで休んだほうがいいぞ」

簪「だ、大丈夫！なんでもないから！」

それを顔が真っ赤な状態で言われてもな……。

一夏「そうか、わかったよ。でも無理はするなよ」

簪「う、うん。それじゃ、早く行こう」

俺は簪と一緒に歩き出した。そういえばまだ自分の紹介をしてなかったな。俺は織斑一夏。現在中学三年生で更識家にお世話になっている。黒髪で黒目。顔はまあ普通だと思う。姉がいる。両親の顔は知らない。俺がもの心つく前に捨てられたらしい。もう進路は決まっている。高校はIS学園に行くことになる。俺の“保護”のためらしい。なぜ“保護”かというと、それにはまずISについて説明しなければいけない。IS……正式名称はインフィニット・ストラス。宇宙空間での活動を想定して開発されたマルチフォーム・スーツ。だが、現在のIS運用は宇宙への進出は目的とされていなく、従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能のためか、今では各国の抑止力の要になっている。まあ、スポーツとして使われてもいるけど。そしてその圧倒的な性能のISを扱えるのは“女性”だけであるということ。そう、“女性だけ”だ。そんななかで異例の“男性”IS操縦者の登場だ。その異例を狙って各国の研究者やからの“保護”である。まあ、正直“保護”した奴らにも下心はあるんだろうけど。そんなことで俺の進学先が決定したと。

それともう一つ、なんで俺が更識家にお世話になっているかというのも説明したほうがいいのか。原因よりも少し前から。それは数年前のことなんだけど。

〈数年前〉

一夏「こんにちはー」

今僕は篠ノ之家に千冬お姉ちゃんと一緒に来ている。ここで剣道の稽古を普段しているけど、今日はただ遊びに来ただけ。

「やあやあ、いつくん。いらっしやい」

僕はいきなり抱きつかれた。

一夏「こんにちは。束お姉ちゃん」

抱きついてきた人は千冬お姉ちゃんの幼なじみの篠ノ之束。ピンクの髪を腰あたりまでのばして、頭にウサギの耳をつけてるひと。とっても頭がいい……はずなんだけどたまに疑いたくなる。

束「さあ、ちーちゃん。ハグしよう」

「黙れ」

束お姉ちゃんが黒髪の女の人にアイアンクローをきめられた。それでアイアンクローをきめてる黒髪の女の人が僕のお姉ちゃんの織斑千冬。黒髪黒目。髪はそこそこの長さがある。

束「さすがちーちゃん。容赦がないね」

千冬「お前とは付き合いが長い。どれくらいまでならやっても大丈夫かはわかっている」

束「たまには優しくしてくれてもいいんじゃない?」

千冬「なるほど、さらに力をいれてくれと」

束「言ってるじゃない! 言ってるじゃないよちーちゃん!」

この会話をアイアンクローをしたまましてました。それよりも東お姉ちゃん、地面に足がついてないけど……。あ、東お姉ちゃんがアイアンクローから抜け出した。

東「う。痛いよう。いっくん撫でて」

一夏「はい」

僕は撫でてあげる。

千冬「お前はほんと東に甘いな」

東「あつはつは。嫉妬かいちーちゃん。しかしいっくんはかわいいな。お持ち帰りしたい。……いやむしろおそ」

東お姉ちゃんの言葉は、いきなりやってきたアイアンクローで止められた。

千冬「お前は何を言っている。そしてそういう趣味があったのか？」

東「ないけど、いっくんが相手なら目覚めてもいいかな」

千冬「はあー、これが私の幼なじみとはな……」

東「うーん。ちーちゃんもある意味人のこと言えないような気もするけどな」

千冬「どういう意味だ？」

東「だってちーちゃんって重度のブラコ」

パキヨっという軽快な音がなったと同時に、束お姉ちゃんが喋らなくなった。

千冬「そんなわけないだろう」

そう言って手をはなしたら束お姉ちゃんが床に倒れた。そのまま起き上がらない……。いったい何があったんだろうね。なんとなくなるけど、分からないことにしておこう。

一夏「あ、そうだ。千冬お姉ちゃん」

千冬「どうした一夏？」

一夏「束お姉ちゃんが言っただブラコって何？」

千冬「一夏。知らないものを知ろうとするのはいいことだ。だが、世の中には知らなくてもいいものもある。そしてさっき束が言ったのは知らなくてもいいものだ。わかったな」

一夏「う、うん」

怖い。正直、わかったとしか答えられなかったよ……。

束「ところでいっくん」

おお、復活した。

千冬「意外と早かったな」

束「いつくんはISに興味はない？」

一夏「アイエス？ たしか束お姉ちゃんが開発したとかなんたかの？」

束「そうそれ」

千冬「おい束、何をするつもりだ」

束「まあまあちーちゃんおちついて。いつくん、私はね、ISでちよっとした……うっん、壮大な夢があるんだよ」

一夏「夢？」

束「そう、夢。ISでの宇宙進出して夢」

一夏「おお」

束「どうしたんだいいつくん。目をキラキラさせて。興味があるのかな？一緒にやる？」

一夏「うん」

興味があつたのはたしかだから参加させてもらつことにした。

束「了解だよ。じゃあ同士よ！ 夢に向かって頑張ろうじゃないか」

一夏「頑張ろう！」

僕と東お姉ちゃんは握手を交わした。

千冬「ちよつと待て東。一夏に危険なことをさせるのは……」

東「だ〜いじょうぶだよ、ちーちゃん。いっくんに危険なことなんてないから」

千冬「し、しかし……」

千冬お姉ちゃんはそんなに僕を心配してくれてるんだね。

一夏「大丈夫だね。千冬お姉ちゃん。東お姉ちゃんも大丈夫だって言ってるし」

千冬お姉ちゃんの不安がなくなるようにと笑顔で言った。

千冬「……わかった。ただし、東が暴走しないように監視しよう」

東「……ちーちゃん、素直じゃないね」

千冬「うるさい黙れ」

僕には何を言ってるのかさっぱりだけどなんとかまとまったのかな？

東「それじゃあまずは、ISについての勉強から始めようか。知識がないと出来ないからね」

それからしばらくたったある日、東お姉ちゃんとの勉強を終えた僕はうるうるとして歩いていった。そしてある一室に辿りついた。そこには千冬お姉ちゃんの愛機のISがあった。それをちよつとした興味で

触ってみたら起動してしまった。

一夏「えーと、どうしよう?」

どうしようか悩んでいたら誰かきたみたい。

千冬「一夏、ここにいたのか。ダメだろあんまり勝手……に。なんの冗談だ」

千冬お姉ちゃんも今の状況には戸惑っているみたい。

千冬「一夏、ここで待ってる。束を呼んでくる」

そう言っただけで部屋から出ていく千冬お姉ちゃん。しばらくして。

束「いやー、驚いたね。まさかいつくんがISを動かせるとは」

千冬「束、このことが世の中にはれないようにしたいのだが」

束「そうだね。もしこのことが知れたら、人体実験コースだってありえるしね。今のところは隠すのに賛成だよ」

ちなみに今の世の中では、ISは女性にしか扱えないものとされている。そんななかで男の俺がISを動かしたとなれば、確かにそれはあるかもしれない。

束「隠すにしても情報操作くらいしか私は出来ないよ。まあばれない自信はあるけど」

千冬「すまないな、束」

束「これもいつくんのためだよ」

このあとしばらくしてから、篠ノ家の引っ越しがあった。束お姉ちゃんの引っ越し後、千冬お姉ちゃんは念のためある家に保護を求めた。千冬お姉ちゃん曰く、信用できるところらしい。その家が更識家。

↓時間は戻って現在↓

まあこんなことがあって今、更識家にお世話になってるんだ。束さんとの夢は諦めてない。篠ノ家の引っ越し以降も束さんとは連絡をとっている。更識家に来てからは更識家の人から武道の訓練やISについての知識などを教えてもらい、千冬姉からは剣術を教わっている。しかし千冬姉は更識家とどんな繋がりがあったんだろう。まあそんなことはいいな。もう世の中には俺がISを使えるのはばれてる。人目を気にしなくてよくなるのはいいな。いや、これから逆に注目をあびるのか？ 考えないようにしようかな。さて、これからのIS学園での生活はどうなるのかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8145y/>

IS こんな始まり

2011年11月24日02時54分発行